

平均産次と平均除籍産次⑤

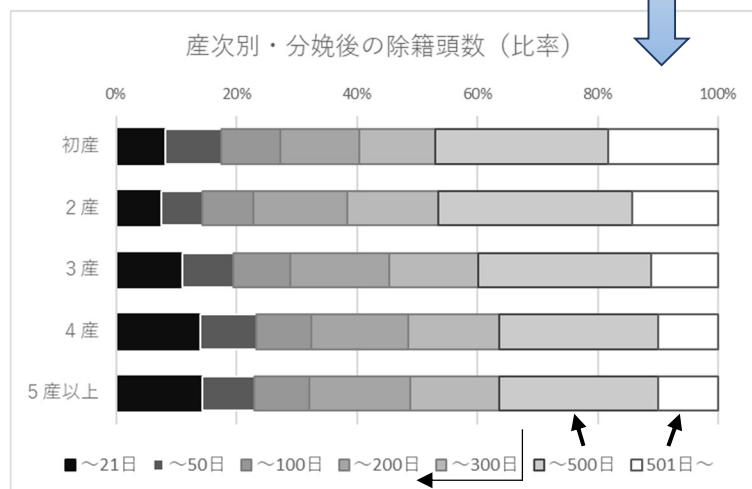
分娩後、どのくらいの日数で除籍される乳牛が多いのでしょうか？ 乳検データから調査してみました。



道内の検定農家で 1 年間に除籍された乳牛 103,947 頭を対象に、産次別・除籍日数区別に集計した結果は表のとおり、またその比率を図で示すと右下のようになりました。

	～21日	～50日	～100日	～200日	～300日	～500日	501日～
初産	1,316	1,503	1,574	2,104	2,025	4,632	2,929
2産	1,566	1,447	1,768	3,290	3,145	6,772	2,982
3産	2,550	1,955	2,174	3,823	3,417	6,631	2,558
4産	2,585	1,723	1,680	2,964	2,790	4,878	1,840
5産以上	3,633	2,167	2,348	4,212	3,757	6,693	2,513

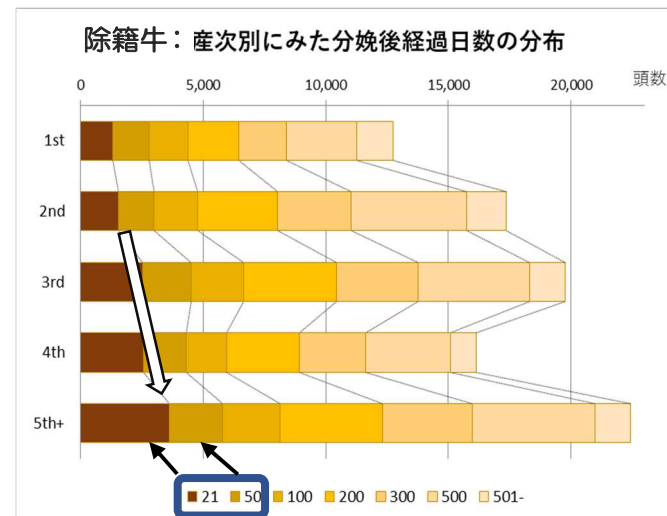
この結果をみると分娩から300日以内に除籍される乳牛頭数は全体の過半数を占めていることが分かります。301 日を超過してからの除は、不受胎などといった事由で産乳量が低下するまで搾乳が継続された後に除籍された乳牛が数多くいるでしょう。またその一方では乾乳



後に次の産次を迎える前に除籍される乳牛（乾乳中の事故）もいれば、乳用で売却された乳牛も相当数いるでしょう。



左のデータでは分娩後、かなり長期（1 年半以上）を経過してから除籍される乳牛がかなり多いので、分娩から 301 日を超過した乳牛は乾乳してから速やかに除籍された乳牛に限定



して再集計すると左図のとおりになりました。

酪農経営面からも少なからぬダメージとなる分娩後、早期（21 日以内）のうちに除籍されてしまう乳牛頭数は産次が進むにつれて増加傾向にあり、高産次牛の周産期疾病のリスクが高いことを伺わせます。また初産牛においても産褥期に除籍される頭数は決して低くはありま

せん。初めての分娩に対するストレス軽減策や難産への配慮が重要な課題となるでしょう。

さらに分娩後50日まで、つまり概ね泌乳ピークを迎えるまでに牛群を去っていく乳牛は、除籍牛全体の 1/4 近くを占めています。全道の検定農場において 1 年間で分娩後50日までに除籍される乳牛頭数が 2 万頭を超過しているという事実は、生乳生産性や経営向上のボトルネックとなりかねない課題であり、依然その軽減に向けての取り組みが重要であることが理解されます。

泌乳初期における除籍牛がどれほどいるかは、各農場や季節、自給飼料やカウコンフォートのレベル、さらには分娩の偏りといった諸要因によって違いがあります。



カウコンフォート

1 頭でも多くの乳牛が分娩後も高い健康レベルと生乳生産性を維持し続けるためには、カウコンフォート、嗜好性と栄養価に富む自給飼料をベースとした栄養管理、異常に対する早めの察知と対処といったことへのさらなる充実が求められるでしょう。

※「平均産次と平均除籍産次①～⑤」の一連の情報は、北海道酪農検定検査協会のデータをもとに釧路乳検連が分析したものです。

